

高橋和巳全集

第十卷

監修 吉川幸次郎
埴谷雄高

河出書房新社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

高橋和巳全集 第十卷

小説10 ©1978

Printed in Japan

一九七八年 一月十日 初版発行
一九八四年 四月二十日 再版発行

著 者 高橋 和 巳

発 行 者 清 水 勝

発 行 所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 営業〇三―四〇四―一二〇一
編集〇三―四〇四―八六一一
振替 東京〇―一〇八〇二

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

黄昏の橋 3

遙かなる美の国 243

三人の父 253

習作 奇妙な終宴 261

習作 神よ、我れこの児を殺さむ 301

習作 国家 325

解題・補記・補訂 329

第十卷
小説
10

黄昏の橋

ゝ何事の起りしやは明らかならず、
そのとき橋はたそがれてあればなり

第一章

1

道路からやや奥まった玄関の潜戸から、甃石^{しきいし}づたいに、軒のたれこめた勝手口の障子紙が淡く輝いているのがみえた。胸をつきさすように平和にみえた燈火は、しかし点滅することもなく、しばらくたたずむうちに、つるべ落しの落日のように色褪せていった。いや、それは燈火自体が輝きを失ったのではなく、たたずんでいる彼の内部に風が吹き抜けたにすぎなかった。

勝手口に向って左側は隣家と区切る低いコンクリート塀、右は今は活用されぬ離れと腰生垣^{あきぞと}が甃石に沿っている。やがて崩れるのをまつ老朽建築にふさわしく蒼い旻天^{あきぞら}の影が屋根の上におちていた。甃石が濡れて光るのも、おそらく散水のためではないだろう。後手に潜戸を閉めて、時枝正和^{ときえだ}は、さるすべりの樹のかたわら、外燈のない薄闇と、生垣のくちなしの葉に半ばおおわれた郵便箱を覗きこんだ。

——誰からも何もきてはいなかった。いや、むやみと音信のあろうはずのない郵便箱を往き返りに覗きこむのは単なる悪癖にすぎず、実際に来信を期待してする動作ではなかった。

「司書の講習がありましたね、おそくなりました」

携えていた書類カバンを下駄箱の端において、彼は控えの間の窓寄りにすえられた安楽椅子に腰かけてい

た婦人に言った。発散する醜臭^{くんしゆう}をはばかって息をひそめた時枝の胸は、無意味な深酒に気味わるく高鳴った。

そのとき二年間みなれた控えの間の丸窓が、奇妙に滑稽に思われたのは何故だったろうか。

「またお酒をおめしですね」くつろいだ時には四国弁をつかう下宿の主婦が丁寧に言った。

「いや」

誰を待っているのか、編物も持たず控えの間にいる婦人の素朴な顔立ちからぼろりと一つの表情が落ちた。街路を歩んでいたときには感じられなかった秋の風が、前裁に面した円形の窓から吹きこんできていた。道路ひとつ距てた家並みの彼方は、古い神社の境内になっていて、風は揺落する樹木の香りがした。そのうえ、戦災を免がれた古都の家にだけある黴臭い畳のにおいがまざる。

「外はもう寒いでしょうに」

「ええ、川辺りは、すこし」と彼は言った。

たしかに彼が油をうっていた川堤の旗亭^{きてい}では赤に白字の小旗が、窓から瞰下せる中洲の葦よりもはげしく吹きさらしに飄っていた。月給取りや日傭が酔って囃す流行歌は、亡国の歌のように寒々していたと思う。

「晩御飯は食べてきなすった？」

素早くすり抜けて自室に逃れようとした時枝にむけて婦人は言った。彼は置き忘れたカバンをぼんやりと振りかえった。忘れ物と彼とを見較べる婦人の目は、彼をいらいらさせる憐愍の瞳だった。そのとき、隣室の電話台のわきに立ち止り、しばらくの間、彼らのいる控えの間を窺う人影のあるのを時枝は意識した。この家の、二人いる娘のうちの一人、おそらくは姉の方の、不運な出戻り娘に違いない。人影は障子越しに寸時たたずんで逡巡した。その影が揺れてみえたのは、しかし時枝が酔って横様に揺れていたからだろう。「ふん、いい気なもんね。毎晩、酔っぱらって帰ってきて……」人影はわざとらしい足音を残して奥へ去った。

「ちょっと待ってくださいよ」彼は額を拳で軽く打ちながら言った。

「どうかしなすった？」矢野駒は言った。

「いいや、つまりですね」

ときおり、彼は人に説明できない奇妙な幻覚におそわれる。神経質に空拭きされた玄関の扉、さすがにそれだけは磨くわけにもいかぬ古びた矢野章生なる標札を見たときなど、それがたしかに彼の下宿であるにもかかわらず、どうしても帰る家を間違ったという気がする。ネクタイを弛め、安心して入ってゆくと、まったく見知らぬ人間が恐ろしい面相をして出てきそうな気がする。いや、たとえ、相手が満面に微笑を浮べて出迎えても、ひょっとと振返ると、目も鼻もないのつべらぼうが笑っているかもしれない。爬虫類の肌、焰のような二枚舌、不気味な怪物たちが中世の幻想画のように踊り狂う。背後を振返ってはならぬと命令されたオルフェウスの恐怖を、彼はそのとき理解する。

「何を考えてなさる？」婦人が椅子の肘当てを小刻みに打った。

「いや、不規則な食事をとるもんだから、さっきから考えてるんだけど、晩御飯を食べたんだったかどうか忘れてしまってますね」時枝は苦笑した。「今日は土曜日でしたね。だから博物館の仕事は昼まで、……確か一時すぎには外に出てですね。それから司書資格の講習会があって……おかしいですか？」

博物館の学芸員と図書館の司書は取得すべき科目の単位が違っている。とはいえ彼はすでに学芸員の資格をもち現に博物館に勤めているのだから、それはいくぶん余計なことだった。だが上司に薦められ自分もある下心があつて集中講義のかたちで行われる司書の講習をうけていた。むろん書籍やカードの分類法は博物館の巻物や器物の整理にもすぐ役立ちちはする。しかしその講習会のあるなしにかかわらず、彼の帰宅の時間は、いつものことながらおそすぎた。しかも下宿の婦人が要求しているわけでもない弁明をくだくだしくつらねながら、悪酔いした彼の頭にはもはやその講習の内容も、それから解放されてのちの自分の行為にも確信がもてないのだった。

「お食^あがんなさい。折角、用意してあったんだから」矢野駒は立ちあがった。彼女は時枝の肩に手をおき、その肩越しに柱時計を眺めてから、台所へ立った。「お部屋でより、ここで食べてくださるでしょう。面倒

だから」

仕方なく酔漢は「はあ」と答えた。そのときパン屋の広告の刻みこまれた柱時計の音が大きく甦った。てれかくしに頭を掻きながら、彼は、心温かい饗応、宿主の日頃の寛大な待遇を、不当にも胸苦しく感ずるいじけたエゴイズムと闘わねばならなかった。いつごろから鬱積したのか、いまにも爆発しそうな褐色の憤怒が胸のあたりいつぱいに詰っていた。いや、彼の憤怒には、そもそも、いつ、何故に、というはつきりした理由はなく、しかも爆発させようにもできぬ微温的な職場と、噴出させようにも機会のない密室を往還しているうちに、すでにその明瞭な輪郭すら失っていた。時折り、風の吹く夜など、砂丘の砂のように飛び散り、松の梢を蹴って消えたと思える時もある。しかし目醒めれば、生活の波音とともにそれは蘇る。まるで彼につき従う能のない影法師のように。

日々は張合いなく憂鬱にすぎ、その影法師だけが輪郭はぼやけながらも、全く消失することなく彼につきまとう。初めは確かに自己以外のものに憤っていたはずだった。だが、日々の職務にも忠実にはなれず、つまらぬ失敗を重ねているうちに、いつしかその影は彼自身を譴責するものに変ってしまったのだ。

彼は大学卒業後、すでに数種の職業を転々としていたが、現在の職場での孤立も責任は残念ながら彼の側にあった。上役の信頼を失い、同僚にも気味わるがられるようになったきっかけは、昨年の秋に起った。ある週日、彼は大和の古寺へ円山応挙の掛軸の借款交渉に出張を命じられた。出発のさいは憂鬱どころか、ほとんど足が宙に浮いていたと思う。どこで観察したのか、瀕死の原爆被災者のように手首を折った異様にリリスティックな亡霊の絵だった。軸の幅、添え地の絹質から、紙魚の数まで精密に記録し、借用書を手渡し、急遽、その成果を伝えようとした彼は、帰りの駅であわてて、反対側の列車に飛び乗ってしまったのだ。失策の名にすらあたいたくない瑣細な過失にすぎない。彼もまた、一種浪漫的な気分ですべてから遠ざかってゆく蜜柑畑の風景を眺めていた。ところが、翌日にも、さらに三日、四日、五日たっても、彼は博物館の館長室に報告にあらわれなかった。上役の心配、そして彼自身の意図に反して、南畿のある河畔の木賃宿で、田舎

女中を相手に、金銭のつづくかぎり大酒を呑んでいたのである。どうしてそんなことになったのか。釈明を求められても、彼にも答えられなかった。ただなんとなくそうなってしまったのだ。

乗り違えた列車に一時間ばかりぼんやり坐っていて、引きかえすべく降り立った駅のまちかに素晴しく透明な川が流れていた。敢ていえば風景の魅惑、その川の水の碧さがいけなかったのだ。彼は川辺に立って暫く釣人の竿さばきを見物し、そして樹々や山肌の輪郭が浮き彫りになる夕暮れの道を川に沿って遡った。その川沿いの道にもバスは通っていたが、それには乗らなかった。そして日の暮れるところに、ほんの二、三軒、山に抱擁されるように建っている鉱泉の宿があった。

交渉は失敗したわけではない。むしろ意外にスムーズに進捗したのだから、電話でも報告しておけばよかったのだ。事実夕食に酒を添え、やがて際限なく盃を重ねながらも、時折り彼はそう思っではいたのだ。出張先で風邪をひいてしまったと言う方便でもいい。ともかく連絡さえすれば全き信用の失墜という最悪の事態はふせげたはずなのだ。だが彼は何らの手を打たず、馬鹿笑いをし、あるいは不意に涙ぐんだりして茫然と酔いつづけていたのだ。

むろんそのことで、ただちに退職を勧告されたというわけではない。展覧会そのものには何の支障もなかったのだから。しかし彼は自分の犯した行為を何とも説明できぬまま、ものの見事に上役の信用を失い、いっしょか同僚にも心理的に疎外される位置に立った。

そして実は、説明しようのない失敗は、それがはじめてではなかった。

たとえば数年前、姉の房子が結婚した時もそうだった。彼は姉を愛しており、姉の結婚には何故か心はずまないものを覚えながらも、そうすれば姉が喜ぶだろうとわざわざ友人に頼んでモーニングを借り、早々と汽車の切符も買ってあった。早い目に駅までゆき、早すぎた時間を食堂でつぶしながら、ふと彼は幼少年期、物資が乏しくその絶対的な窮乏のゆえに家族の関係までがぎすぎすした時代、自分を献身的にかばってくれた姉のことを想い起していた。ふっと回想の世界にはまりこんだというだけのことだったのだ。だが、彼が

現実に戻ったとき、予約してあった座席指定の列車はとくに通過してしまっていた。それからの彼の数時間は悲愴だった。タクシーを飛ばして伊丹の飛行場につけたのだが、日曜で大安という日の吉さのために空席はない。あるいはキャンセルがあるかもしれぬという係員の言葉を頼りに彼は次の便を苛々しながら待った。やっと飛行機に乗ったと思うと、しかし機内放送で名を呼ばれて予約者が駆けつけたからと席を奪われた。その時は、水中翼船が神戸から高松まで開通したばかりだった頃で、そのことを思い出して、再びタクシーで神戸まで彼は馳せつけた。姉の結婚式の時間は刻々に迫り、彼は満員の水中翼船の中で人目もばからずモーニングに着かえ、高松の埠頭に着くやいなや韋駄天走りに駆け出した。埠頭から駆けて五分ばかりの会場だったが、彼が駆け込んだとき、すでに宣誓式はすみ、披露宴に入っていて、途中、着がえのために姉は媒酌人につきそわれて絨毯敷きの廊下をむこうから歩いてくるところだった。顔面汗だらけになりお祝いの言葉もはけず肩で息をしている彼に、姉の方から「正和!」と呼びかけ、そして姉は白く白粉を塗った頬に大粒の涙を流した。

その時はともかくも顔はみせたのだから、父母や親類縁者の怒りは買わずにすんだ。しかしなぜ一列車はやく切符を買っておかなかったのか、なぜ一日早く休暇をとらなかったのか。あびせられる人々の質問には答えようがなかった。そして結局は滑稽なものとなってしまうたモーニング姿をもてあまし、彼はついに祝いの感情を共有できぬままに、泥酔してしまったのだ。

この世には、なぜか彼が参加しそこねた法則がある。その法則だけが正義ではないだろうし、彼の方もそれを完全に了承しているわけではないにしろ、声を荒だてて対抗するほどの観念の富もみずからにない。だから、そうした人々の感情を逆撫でにするようなことはすまいと常々、心がけてもいた。

人にはそれぞれ口外しえない苦渋というものがある。それは社会の正義や秩序一般などとは交換しえないにせよ、しえない故にその個人的な苦渋を威丈高に主張はできない。彼にもまた些かの苦しみが、訂正のできない過去の時間の闇のうちに埋めきれずくすぶってはいたのだが、しかしそれを癒す場として、すすんで

黴のはえたような博物館の世界を選んだのであってみれば、仕事がつまらなくて怠けたとは言えなかった。いや、事実怠けたのではなく、どうでもいいと思っていたのでもない。ただ、何となく失策をおかしてしまふのだ。

「まあ、いいさ」時枝は癖になった私語をつぶやき、食事の間へおもむいた。

炊事場つづきの奥の風呂場から、家の子供らの華々しく騒ぐ声がきこえてきた。彼がときおりその復習や予習の手助けをしてやる中学生と小学校に通う兄弟である。上二人が女、下二人が男の子で、兄の方はいま高校受験に忙しく、そして二人とも手におえない甘ったれただった。

「先刻、お家から長距離電話がありましたね。電話口へは徳子が出ただけだ」と

質素な裕の襟を^{あわせ}あわせながら、矢野駒はガス焔炉を覗きこんで言った。ともかく、不思議に落着いた態度で生活し、話す、婦人の顔にはそのときも微笑が浮べられていた。その平和な表情の裏にどうした経験が秘められているのか、時枝には理解できなかった。金銭欲、名誉欲、加うるにこれも難解ななにかの欲望にとられ、ほとんど帰宅もせずあちこち奔走している主人矢野章生から音信があるのかないのか、それも解らない。たぶん政治ゴロといわれるものの一員なのだろう。この古都の繁華街にあった出店も人手にわたり、正業が呉服商であったことは、家族の着ている、古びながらも趣味のいい衣裳にわずかに名残りを留めるにすぎない。矢野駒はしかしなにごともしなかったように微笑していた。すでに二年を経た素人下宿住いであるから、盆や祭りには、共に馳走に団欒し、観劇をたのしんだこともある。昔話の二、三は、そうした機会にきいてはいたが、やはり微笑の内容はわからなかった。

「近々、いちど家へは帰ろうとは思ってたんですけど。ただ……」

茶瓶は軽快な物音を立てて沸騰しはじめていた。

「お家の方、昼間には博物館の方へもお電話をなすってみたんだそうですよ」矢野駒は言った。「それに夕刻には、うちからもあちこちお探ししてみたんですよ。でも、あなたは一体どこにいるのか訳のわからない

人だから」

「ははは」と彼は無意味に笑った。

「笑いごとじゃありませんよ」

一語一語区切るように矢野駒は言った。

採光の点からはまことに前近代的な台所の間は、下宿人用の飯台も片付けられていて、素漠としていた。便利なようで事実はいあまり活用されない魔法瓶の前に、座蒲団が一山につまれている。その上に三毛猫が寝ていた。

「お母ちゃん、そっち水出したら、お風呂の方がでやへんで」風呂場から弟の方の甘え声がした。

「よし、よし」と婦人は声をかけた。

「お母さん、お風呂熱い、熱い」蒸気のためか、不必要なまでに湿りのある兄の方の声がつづいた。

「徳子、徳子、お風呂の加減をみてやって」

奥へ向って駒は声をかけた。だがこの家の出戻り娘の返事はなかった。「しよらない人ね、ほんとに」と言いながら、しかし婦人の目は、深酒の酔いに揺れている下宿人の方に向けられていた。いくらか、こみいった話があるふうだった。そして次に何かがあるという予想が、時枝を不機嫌にした。なにかの好意からでる忠告ならば、聴かずにおこうと彼は思った。道徳や善意などとは縁がないと傲慢に思いこんでいるわけではない。第一、そう思うにしろ、胃の粘膜を自家消化するような素寒貧では駄目なのだ。ある戯曲のヒロインが発狂して、「私はいままで、人様の慈悲によって生きてきました」と述懐するのを聞いたとき、不覚にも彼は舌を嚙んで嗚咽したぐらいだ。今まで触れそこね、これからも錯誤しつづけるだろう、天界の散華のしたたかりのように、暗い客席で彼は奇妙に寒々とした幻をみた。もっとも、それは翌日には忘れ、なにに胸を衝かれたのか理解できず、元のひねくれ者に彼は戻った。昨夜の感傷は今日の虚妄というわけだ。

「時枝さん」と矢野駒は改めて呼びかけた。